
あなたに両手いっぱいの風船を。

奏 歌音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あなたに両手いっぱい風船を。

【Nコード】

N8095I

【作者名】

奏 歌音

【あらすじ】

小学校教師をしている平凡な女性、千春。生徒たちとの関係は良好、教師という仕事にもやりがいを感じているが、いつも何か足りないものを感じている。彼女の心に足りないものとは……？

1

『風船にはお空の精が入ってるから飛べるんだよー』

そんなことを言ったのは、僕の幼馴染の女の子。

今なら、そんな馬鹿な、の一言で済ませてしまっただけねど、当時は僕も子供だった。

『えっ！そーなの？知らなかったー』

そう言っつて驚く僕に、彼女は、

『ほんとだよ！』

2

にこにこ笑いながらはつきりと言い放ったものだった。

自分が信じることに、周りの目や体面なんて関係ない。

彼女にとっつて風船とはそういうものだった。

それだけでいいではないか。

それなのに、どうして、自分を信じてはいけなのだろう……。……。

2

突然、涙が出ることもある。

それは、本当に唐突で、どうしてそれが出るのかも分からなくて、なのに、とても胸が痛くなる。

たとえば、目が覚めたとき。

たとえば、学校の校門をくぐったとき。

たとえば、トイレで手を洗っているとき。

気がつけば、涙が出ている。

理由なんてないのに、悲しみも、悔しさも、わたしは感じていないのに。

たとえば、帰り支度が終わったとき。

たとえば、車に乗り込んだとき。

たとえば、窓の外がきれいな夕暮れだったとき。

止めようとしても、すぐには止まってくれないその涙は、目じりから頬を伝って、服に落ちる。

ぼとぼと、まっすぐに。

同じ場所に、同じ痕を残して。

静かに、ただ、まっすぐに。

その悲しみは、いつも心にやってくる。

朝の空は好きだ。

空気が澄んでいて、新しい匂いがする。

朝日の匂い、優しい花の匂い、朝露の眩しいような匂い。

だけど、そんな綺麗な朝の空を見ていると、寂しい気持ちになるのも事実だ。

何処か、遠いところから呼ばれているような気持ちになる。

遠い、懐かしい人からの思いが、届きそうなの。

久しぶりに、急に涙が出た。

それは、朝、高速道路に乗った直後のことで、うす青い空を眺めながらハンドルを握っていると、気がつけば頬が濡れていた。

「やだ……。どうして」

そうつぶやきながら瀬戸千春せとちはるは自らの指で涙を拭いた。

左手でハンドルを握りながら、右手で両目をこする。

化粧が落ちていなければいいのだが、などと思いながら。

千春は小学校の先生をしている。

千春は子供が好きだ。特に小学校の低学年ぐらいの子はとてもかわいい、と思う。

(だって、あの柔らかかそうなほっぺといったら)

想像するだけで頬が緩む。

さっきまで泣いていたのに笑ってしまうとは、なんともおかしい話ではある。しかし、たとえ泣こうがわめこうが、子供のあのほっぺの柔らかさは変わらない、と思う。

そんなかわいらしい子供たちに会うために、千春は毎日2時間近くもかかる通勤を繰り返している。

それはなんだか使命のような気がするのだ。

今日も順調に車は進み、緑多き桃木小学校の校門をくぐる。門をくぐった瞬間、千春はずっと表情を引き締めた。いつものことだ。

千春は、先ほどまでの緊張感のない顔ではなく、教師の顔で校内に

入っていった。

嘘をつけない仕事って、たくさんあると思う。

たとえば、医者。

たとえば、弁護士。

たとえば、歴史小説家。

みんな、その道に関して、ものすごく勉強している。

たとえば、気象予報士は天気について。

たとえば、検察官は法律について。

たとえば、科学者は自分が研究したい事柄について。

教師だってそう。

星が瞬くのは、別に歌っているのもおしゃべりしているのもなくて、ただ、大気がそうさせているだけ。

空に浮かんでいる雲は、綿菓子なんかじゃなくて、本来目に見えないはずの水蒸気が、一定の温度以下になると水となって見えるようになるだけ。

風船は、空気よりも軽い気体を入れているから空気中で浮くだけなのだ。

それをすっかり、『お空の精がいるからよ』なんていえば、うるさい保護者から何を言われるかわからない。

それって、なんだか、切ない気持ちになる。

「おはようございます」

日直の裕二くんの号令で今日という日はスタートする。

裕二くんはちよつと張り切りすぎて声が裏返ってしまい、みんなの空気が和んだ。

そして30人の声で

「おはようございます!!」

と、大合唱が起こるのだ。

その、変声期すら訪れていない高い声を可愛く思いながら、

「おはようございます」

千春の一日が始まる。

千春は生徒を見るのが好きだ。

朝の会の後の10分の休憩時間、千春は教室の端にある教師用の机に座って足をぶらぶらさせながら、生徒たちをゆっくりと見渡す。

春樹くんは少し風邪気味らしい。こんこんと咳をしている。熱が出ていたらいけないから少し注意してみよう。

由美子ちゃんは本が好きだ。学級文庫の端から端まで読みつくし、今は図書室の本を読んでいる。今度千春自身のお気に入りのお気入りの児童文学を持ってきてあげよう。

敦くんは学級委員。ときぱきと次の授業の準備を済ませて友達と遊んでいる。今日は鉛筆でドミノ倒しをしているんだな。

本当に学校はいろいろなことがあるなあと、こうやって生徒一人ひ

とりを見ていると千春は思う。

子供のころはわからなかったが、これをまとめる教師というのはすごい力をもっている。

自分がそれを持っていると思うのは少々図々しい気がするが、そうありたいと、千春は心から思うのだ。

3

遠足って、懐かしい響きがする。

大人だからっていうのも、あるのかもしれないけれど、子供の頃も、なんとなく懐かしい響きを感じながら、その言葉を口にしていたような気がする。

遠足。

遠くへ足を運ぶこと。

今となってはとっても面倒くさいことだけれど、子供の頃は、とっても楽しみだった。

今は、とっても面倒くさいことだけれど、ね。

今日の3時間目は、遠足の計画だ。

好きな子同士でと班にならせて、班ごとに計画を立ててもらうことにしよう。

小さい子供にそういうことはよくないという先生もいるけれど、私

が子供の頃の先生は「自分が決めたことには自分で責任を持つように」が口癖だったから、千春も生徒たちにだいたいのことは任せられるようにしている。

「先生、決まりましたー」

女子の学級委員の真菜ちゃんが班ごとに分けられた名簿を持ってきた。真菜ちゃんは字がとても綺麗だ。それを受け取り、ざっと目を通す。

千春は、首をかしげた。

「んん？ここに隼人くんが二人いるわよ？」

千春がそう言うと、隼人くんと呼ばれた生徒は頭をかいた。

「ちえ、ばれたかー。どっちにしようか迷ったから、両方書いちゃった」

クラスから笑いがどつと起こる。

隼人くんはこういうキャラクターだ。

隼人くんもその後じっくり考え、片方の班に収まり、それぞれの役割り分担も決まった。

今回の遠足の目的地は近くにある遊園地だ。千春が担任をしている2年生は、電車の乗り方を学ぶということで、電車に乗ることになっている。

乗り物は一日乗り放題のパスを発行してもらったため、お金は必要ない。

「先生、遠足楽しみだねー」

麻紀ちゃんが人懐っこい笑みを浮かべてそばにやってくる。
千春は頬が緩むのを感じた。

こういう封に生徒が自分を慕ってくれていると感じるのは、とてもうれしい。

千春は軽くしゃがんで麻紀ちゃんと視線を合わせ、にっこりと笑った。

「うん、先生も、とっても楽しみよ」

4

変わらないものって、なんだろう。

変わっていくことが生きていくことだ、って言う人は結構いるけれど。

もし、それが本当なら、人生は、なんて切ないのだろう。

世界は、なんて残酷な優しさで、包まれているのだろう。

大切な人、大切な言葉、大切な思い出。

過去は、変わらないけれど。

過去の自分と、今の自分を比べると、明らかに変わっている。

たとえば、顔。

たとえば、声。

たとえば、心。

人間は、変わってしまう。

過去の私も、消えていってしまうのだろうか……。

いよいよ遠足の日がやってきた。

みんな鞆の中にお弁当箱や水筒をつめて、笑顔は晴れやかだ。

昨日、クラスの女の子たちから、「明日のためにてるてるぼつずを作ろう」という意見が出た。

千春は教師という立場を忘れて、「賛成！」とVサインを出していた。

だから、

「てるてるぼつずのおかげで今日は晴れたね！」

そんな愛ちゃん言葉にも、

「そのとおり！」

と笑って返した。

千春は電車に乗るのは久しぶりだった。

高校時代は毎日電車で通学していたが、大学は近かったし、教師になつてからは車で通勤していた。

久しぶりの電車。

子供たちは窓の外を見てはしゃいでいるが、千春はぼーっと電車のシートを見ていた。

何人もの人が座った座席は、少し磨り減り、触れてみると硬かった。そういえば何で電車のシートって赤が多いんだろう。

バスは青が多いわよね。何か意味があるのかしら。

子供たちに聞かれたときに答えられるようにしておかなくちゃ、そんなことを考えながら。

窓の外の景色は絶え間なく流れている。

千春はそんな車内でぼんやりとシートを眺め続けた。

運命的って、具体的にどこからがそうなのだろう。

席替えて4回もその人の隣の席になったとき？

電話をかけようとしたら、その相手から電話がかかってきたとき？
ほしいなあって思ってた物を、その人が誕生日にプレゼントしてくれたとき？

色々あると思うけど。

私としては、再会が一番、運命的なことだと思う。

「わあ、ゆーえんちだあ！」

目的地に到着した生徒たちはきゃあきゃあと騒いでいる。

広場に生徒を班ごとに並ばせ、点呼を済ませた千春は言った。

「それじゃあ、自由行動。時計は持つてるよね？12時になったら
お昼ご飯の時間だから、ここに集合してね」

「はい!!」

生徒たちは元気良く返事をして班ごとに計画したアトラクションに向かって走り出していた。

「ふふ、元気ね」

誰もいなくなった広場で、千春はつぶやいた。

「さて、私は何をしようかな……」

そういったときである。

「おねーさん」

後ろから声をかけられたのは。

「え？」

千春は振り返る。

そこには自分と同じ年くらいのアルバイトらしき男の姿があった。彼はにかつと白い歯を見せて笑った。

「おねーさん美人だね。これ、プレゼント」

そう言って、鮮やかなブルーの風船を千春に差し出してくる。

「あ、ありがとう……」

おずおずと風船を受け取る千春に、その男は

「いえいえ」

そう言っただけで笑っている。

「あー！先生、いいなー」

そう言っただけで千春のクラスのあやめちゃんがやってきた。班の子達も一緒だ。

どうやらトイレに来たらしい。

「ずるーい」

口々に言われてしまっただけで、千春も対応に困ってしまう。

口を挟んだのは、風船をくれた男だった。

「こらこら、先生をいじめちゃだめだぞ」

えー、という声上がる。

「だって、俺は先生の彼氏なんだから」

……はあ？

「ちょっと、勝手なこと言わないで下さいよ」

千春はあせって言い返した。

男はいたずらっぽく笑う。からかっているのか。

「えー！先生、ほんとーなの？」

みんなが詰め寄ってくる。

男は相変わらずにここにこしている。

「そ、そうなの。……多分」

仕方がない、今は乗ったほうがいいらしい。

そう考えた千春は苦笑いしながら答えた。

うわー！という声上がる。

しかし、なんとか風船からは話がそれたのでよしとしておきたい。

と、思いきや。

「先生。ふーせんってなんで浮いてるの？」

思わぬところから質問が来た。

おいおい、もう彼氏のことはいいいのか。生徒たちの切り替えの早さに千春はびっくりさせられながら、でも答えようとした。

「それは……」

しかし。

「お空の精が入ってるから、だよ」

またもや、この男に邪魔をされた。

千春はこのいい加減な男を睨みつけたくなる。

自分はアルバイトの分際で、もう子供たちに会う機会もないだろうからいいけれど、千春は明日も明後日も生徒たちとかかわっていかねければならないというのに。

「もう……」

文句を言いかけたそのときだった。

「って、千春先生が言ってたよ」

と。

記憶が、鮮明に蘇った。

そう、それは私が、いや、私たちがちょうど今の生徒たちと同じ年頃だったときの会話。

『風船にはお空の精が入ってるから飛べるんだよ』

『えっ！そーなの？知らなかったー』

『ほんとだよ！』

確かに、私は、幼馴染の男の子に、そういった。

「ま、まさか、冬哉なの……?」

呆然として尋ねる。

男は、にやり、と笑って、

「そのとおり」

それから千春の腕をつかんで走り出した。

5

心に残るものって、素敵。

素晴らしい音楽や、優しい言葉。
美しい景色。

時が移り、それ自体はなくなってしまうても、それに触れた人の心には、ずっと残っているわ。

ずっと、残っているわ……。

16

男、幼なじみだった岡山冬哉おかやま とつやが千春を引っ張っていった場所は、観覧車だった。

「はあ、疲れたー」

ゴンドラに乗り込んだ冬哉は笑いながらそういう。

「本当にね」

千春は少しいちみっぽく言った。

こんなところで子供時代の知り合いに会うとは思っていなかったか
ら。

「久しぶり」

冬哉は緊張感なく言う。

ゴンドラの外の景色は動いている。電車とは違って非常に緩やかに。

言いたいことはたくさんあった。

転校したはずの冬哉がいつこの街にやってきたのかとか、こんなところなぜ風船を配っているのかとか、彼女ってなんだよとか、子供たちにいい加減なこといわないでよ私が言ったって言っても昔のことじゃないのとか。

しかし、こんな緩やかな時間の中でそんなことを言うのはばかりしかなかった。

「久しぶりね」

そして、千春は観念して、彼に言葉を返した。

「千春は先生やってるんだ？」

冬哉が尋ねてくる。

「そうよ。大変だったんだから、勉強とか」

千春がそう言うと冬哉はほーっ、っとからかうように笑った。

「あの勉強嫌いがねえ」

「……うるさいわね」

昔の知り合いというのは、こつこつ風に当時のことを蒸し返そうとするから苦手だ。

「馬鹿みたい……」

「え？」

聞き返してくる冬哉。

千春は、また自分が涙をこぼしているのを感じた。

「過去に執着する人間なんて、くだらないって言ってるの！」

思わず叫んでいた。

冬哉は呆然としている。

千春は自分の涙の理由が、わかったような気がした。

自分は悲しいのだ。

変わっていくことが。

切なくてたまらないのだ。

『風船にはお空の精が入ってるから飛べるんだよー』

子供のころに信じていたことを、否定して、馬鹿らしいと笑うことが、たまたまなく寂しい。

変わっていくことは、生きていくこと。

そんなありきたりな、冷たい台詞なんか聞きたくない。

それで跳ね返せるほど、自分の過去はくだらなくない。

過去に執着しているのは、自分ではないか。

冬哉に八つ当たりして、自分は、本当にひどい人間だ。

観覧車は天辺を越え、下っていくところだった。

冬哉が口を開いたのは。

「うん。俺も、そう思う」

少しだけしんみりとした、優しい声だった。

「自分にとって全てだと思ってるこの瞬間も、一瞬で過去になる。

それって、哀しいことがあったときにはありがたいことかもしれないけれど、幸せを感じるときには、ものすごく哀しいことだよね」

自分にとっては今が全て。

確かにそのとおりだと思う。

子供時代、冬哉と風船の話をしていたときも、これがいつか過去になるなんて、思ってもみなかった。

「それで、いつかやってくる。自分にとって大切だったことを、一度も思いださなかったって日が」

冬哉は、静かに微笑んだ。

「俺さ、千春に会うまで、かなり長い間、千春のこと忘れてた。あんなに幸せな時間だったのに」

それって、切ないことだよ。そうだった冬哉の目には、一粒の涙が

光っている。

「けどさ、」

ふうつと、冬哉は息を吸った。

「忘れてても、消えるわけじゃないから。忘れるってことは、なくなるって事とはぜんぜん違うから」

涙がこぼれる。

たった一粒だけ。それ以上はこぼれない。

冬哉は笑顔だったから。

「だから俺は千春に会えてうれしい」

6

あなたに両手いっぱい風船を贈ろう。

たとえ空は飛べなくても、心はどこへでもいける。

真っ青な風船を体に沢山つけたら、なんとなく飛べるような気がするじゃないか。

だって、青は海だし、青は、空だから。

保証はしないけど。

二人で手をつないだら、きつと、何かが見えるよ。

観覧車のゴンドラから降りた千春は大量の風船を手にしていた。
冬哉から譲り受けたものだ。

「ツケにしといてやるよ」

冬哉のその笑いは、また会いたいと言ってくれているようで、照れくさくなった千春は

「けちな男は嫌われるわよ」

と返した。

そして千春は歩き出す。

素晴らしい晴天の中、千春の足取りとともに風船がゆれる。
青空のそれよりももっと濃い、真っ青な風船たち。

千春は笑い出したくなる。
ついさっきまでの凝り固まった気持ちが、嘘みたいに溶けていくのを感じた。

もう涙は出ない。

笑みしかこぼれない。

だから満面の笑みで伝えよう。

私の可愛い生徒たちに。

ほかの先生やうるさい保護者なんて知らない。むしろうまく言いくるめてやるつ。

風船はお空の精がいるから浮かぶんだよと。

(後書き)

優しいお話を目指して書きました。

大人になるって、どういうことなんだろう・・・。

そういうことを想像しながら書いたお話です。

このお話を通じて何か感じていただければ、うれしいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8095i/>

あなたに両手いっぱいの風船を。

2011年10月5日14時30分発行